

<書評>

江口怜著

『戦後日本の夜間中学—周縁の義務教育史』

東京大学出版会 2022年3月

浅野慎一（摂南大学）

本書は、1970年代初頭以前の日本の夜間中学の歴史に関する研究の、現時点における「到達点／金字塔」といってよい。今後、同時期の夜間中学についての研究は、本書との関係・対比においてそのオリジナリティを明示した上で発表される必要があるだろう。

本書は、夜間中学の歴史を、①制度・政策・運動、②生徒の生活世界と学校経験、そして③教師の教育実践の3つの位相から立体的に叙述する。また夜間中学の地域的多様性についても、詳細かつ明晰に描き出す。

本書の基本的な視座は副題にある如く、「周縁の義務教育史」である。すなわち夜間中学は義務教育の周縁に位置し、同時にそこで学ぶ生徒は社会において周縁化された人々だ。夜間中学は義務教育の周縁的制度の創出であると同時に、義務教育の内実・実践が周縁化された人々との関係の中で作り変えられてきた現実を明瞭に物語る。

本書の卓越性は、3点に総括できる。

まず第1に本書は、極めて周到かつ緻密な史料収集・読解、および独自のインタビュー調査に基づく「分厚い」実証研究だ。本書で新たに発掘された諸事実、およびそれをふまえた新たな知見は、紙幅の関係上、個別には言及できないが、枚挙にいとまがない。

第2に本書は、夜間中学の単なる賛美の書ではなく、その歴史的制約をも明晰に解明している。

その内実は、①「あってはならないが、なくてもならない」夜間中学の両義性、②教師の社会防衛論的発想・啓蒙主義的教育実践が生み出す生徒との亀裂・軋轢、③「就学を正常とし、不就学・長欠を不正常とする」認識それ自体が孕む「統治」・「支配性」、したがって④「義務教育の権利保障」という目的設定そのものが内包する限界など、重層的だ。そしてこれらの根底にあるのは、戦後日本の民主主義・義務教育それ自体の歴史的制約を剔抉するポスト・コロニアリズムの観点といえる。

しかも本書の分析は、ポスト・コロニアリズムの観点からの後付け的な「断罪」ではない。教師の教育実践における葛藤・揺らぎ、および教師の成長過程を丁寧に掬い取っている。

こうした複眼的分析を可能にしたのは、「周縁の義務教育」という基本的な視座であろう。すなわち「周縁」は「外部」や「他者」とは異なり、支配的・中心的な価値や場所と何らかの形で通底している。また周縁においては「包摂」と「排除」の二元論は無意味であり、「包

摂という行為もまた権力行使の一形態」(p.19)にはかならないのである。

そして第3に本書は、夜間中学生を単に「生徒」と捉えるのではなく、そのトータルな生活史・生活過程の中で夜間中学が果たした意味を考察している。

そこで本書の視野は、学校外の地域社会における産業構造変動・社会文化的背景にも及ぶ。行政や教師が意図しなかった夜間中学の意味も、学校や教師に対する不満・葛藤を含めて把握される。ポスト・コロニアルの現実の社会変動との関連で、夜間中学とその変遷の意味も考察される。

特に漁村の生産・労働様式、および被差別部落の生業や社会文化・差別と夜間中学の関係について、本書は既存の研究水準を一階梯、高めている。

さて、優れた研究成果に対する最大の尊敬の表現は、忌憚のない批判であろう。

評者は以下の3点において、本書を批判する。

まず第1は、ポスト・コロニアルの観点の不徹底だ。

本書の中で「ポスト・コロニアリズム」の概念は、日本でしばしばそう見なされているように、植民地支配の歴史やその受けとめ方といった意味合いで用いられている。しかし本来のポスト・コロニアリズムとは、国民主権や民族解放の達成それ自体が孕む歴史的限界の批判的克服の視座であろう。

したがってポスト・コロニアリズムの観点を貫くならば、「あつてはならないが、なくてはならない」のは夜間中学だけでなく、昼間の学校を含む義務教育そのものであるはずだ。夜間中学の葛藤は「周縁」としてのみならず、義務教育としての普遍主義や支配的価値にも起因する。

しかし、本書で指摘される「不就学を問題視する『統治』のまなざし」への批判、および「包摂もまた権力行使の一形態」といった認識が本書において貫徹されたのか、やや疑問ではある。社会防衛論や啓蒙主義を克服し、義務教育をウェルビーイングの実現の場としたとしても、それは当然、より周到な「統治」・「包摂」にはかならない。

このことは、義務教育制度の周縁としての夜間中学、および社会で周縁化された生徒という、二つの「周縁」性の狭間にある越えがたい断絶性をどこまで直視するのか、という問題でもある。両者を統一的に捉える本書の「周縁の義務教育史」という視座は事実上、前者の「周縁」性の歴史に収斂されざるを得ないのではなかろうか。

それとも関わって第2の問題は、夜間中学生のトータルな生活を捉えるまなざしの不徹底だ。

これは、「生徒の生活世界」を「制度・政策・運動」や「教師の教育実践」と対等に鼎立させ、立体的把握をめざす本書の基本的方法の是非に関わっている。

評者は、生徒のトータルな生活こそが夜間中学のあり方の根底的な規定要因であり、制度・政策・運動や教育実践はその従属変数でしかないと考えている。この認識を基礎に据えなければ、本書でも引用されている「生徒のつきつける問題にたじろぎ、おたおたし、

よたよたついてゆく。それが夜間中学校なのだ。」(p.204)という教師の発言の重みは受けとめきれまい。

この問題は、夜間中学の史的変遷の時期区分に最も明瞭に立ち現れる。本書は「生成期(1947～54年)」、「縮小期(1955～66年)」、「再編期(1967～73年)」と区分する。そのメルクマールは、全国夜間中学校研究会の動向(教育実践)、および行政管理庁の夜間中学早期廃止勧告(行政)であり、生徒の生活実態やそれをもたらした学校外の社会構造変動ではない。生徒の生活実態をメルクマールにすれば、一層現実的で実践的な時期区分が浮かび上がったのではないか。

さらに本書が、生徒の生活を唯一無二の根底的な規定要因に据えることができなかった理由の一つは、客観と主観、経済と文化、個人と社会を一体不可分のものと捉える「生活過程論」ではなく、それらを分離して主観・文化・個人を重視する「生活世界論」にとどまったからであろう。

そして第3に、ポスト・コロニアリズムの観点、および生徒の生活過程の把握がともに不徹底であることの弊害は、「再編期」以降に急増した多様な生徒(障害者・引揚者・移民・在日朝鮮人等)へのまなざしに、とりわけ顕著に立ち現れているように思われる。

ただしそれらについて本書は「本格的には検討できなかった」(p.526)と述べ、今後に残された課題の一つとして「再編期以降の夜間中学の歴史的展開の検討」(p.528)を挙げている。

是非、今後の検討を待ちたいところである。

以上、批判を縷々述べたが、これらはいずれも対等な研究者としての挑戦的論争であり、卓越した研究成果に対する尊敬の表明だ。

著者による真っ向からの反論、そして今後の協働的論争の行方がとても楽しみである。